

ひみつの扉をぬけて

—英米児童文学に描かれた魔法の国への行きかた—

Stepping Through the Secret Door: Passages to Fairyland in Children's Literature

沢 辺 裕 子

はじめに

『ナルニア国物語』の作者C・S・ルイスは「子どもが魔法の森のことを読んだからといって現実の森をばかにしたりはしない。それどころか、かえってそのために現実の森はいくぶん魔法がかかってみえてくるだろう」と言った¹⁾。『指輪物語』の作者J・R・R・トールキンも「ペガサスを創り出したことによって馬が高貴なものとなった」と〈ファンタジーの回復効果〉についてのエッセイのなかで語っている²⁾。英米児童文学のファンタジー作品には、主人公が現実世界から異世界の魔法の国へと入ってゆく舞台設定のものが数多くみられるが、そのほとんどの場合、魔法の国への入り口は現実世界に存在するありふれたものや場所で、特別な道具や空間移動の魔法の呪文を必要としたりしない。そのことが日常世界と「地続き」の場所に不思議な世界が存在しているかもしれないという「連続感」を読者にあたえている³⁾。読者にとって魔法の国への入り口は自分の身近にある場所であればあるほど、主人公への感情移入がたやすくなるであろうし、しかも物語世界の記憶のおかげで自分の平凡

な日常の奥行きが深まってゆく。自分の周りにある日常が特別な意味を帯びはじめるのだ。それこそがトールキンの言う〈ファンタジーの回復効果〉だろう。

ここでは、そのような読者の世界に存在する平凡な場所から、物語の主人公が魔法の国へと入ってゆく場面を英米児童文学の代表的な作品のなかから読んで、日常のどのようなものや場所に魔法がかけられているのかをみてゆきたい。ルイス・キャロルの二冊の『アリス』の物語、L・フランク・ボームの『オズの魔法使い』、ジェイムズ・M・バリの『ピーター・パン』、C・S・ルイスの『ライオンと魔女』、フィリップ・ピアスの『トムは真夜中の庭で』、J・K・ローリングの『ハリー・ポッターと賢者の石』を年代順に取り上げる。

1. うさぎ穴、暖炉の上の鏡

ルイス・キャロル (Lewis Carroll, 1832-98) の『不思議の国のアリス』 (*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865) はイギリス児童文学の黄金時代の幕開けを飾る作品だといわれている⁴⁾。それまでの子ども向けの本はもっぱら教訓的なものばかりだったが、ここで初めて純粋に子どもの楽しみのための本が誕生した。そしてそれにふさわしく、アリスは現実世界から不思議の世界へと入ってゆく。川べりで挿絵もついていない本を読んでいる姉のそばで退屈していたアリスは、懐中時計をみながら走ってゆく白いうさぎに気がつき、跡を追ってゆく。

..... when the Rabbit actually *took a watch out of its waistcoat-pocket*, and looked at it, and then hurried on, Alice started to her feet burning with curiosity, she ran across the field after it, and fortunately was just in time to see it pop down a large rabbit-hole under the hedge.

In another moment down went Alice after it, never once considering how in the world she was to get out again.

The rabbit-hole went straight on like a tunnel for some way, and then dipped suddenly down, so suddenly that Alice had not a moment to think about stopping herself before she found herself falling down a very deep well.

Either the well was very deep or she fell very slowly, for she had plenty of time as she went down to look about her, and to wonder what was going to happen next. First, she tried to look down and make out what she was coming to, but it was too dark to see anything; then she looked at the sides of the well, and noticed that they were filled with cupboards and pictures hung upon pegs. She took down a jar from one of the shelves as she passed; it was labeled “orange marmalade,” but to her great disappointment it was empty: she did not like to drop the jar for fear of killing somebody, so managed to put it into one of the cupboards as she fell past it.....

Down, down, down when suddenly, thump! thump! down she came upon a heap of sticks and dry leaves, and the fall was over.⁵⁾

うさぎ穴のある野原なんてイギリスにはいくらでもある風景だろう。服を着て懐中時計を持つうさぎというのは現実離れしているものの、子どもがみかけた動物を追い掛けるのは自然な行為だし、うさぎ穴のなかに入ってから、深い井戸をまっすぐ落ちてゆく途中でアリスがみたり考えたりすることがすべて日常的なものもおもしろい。井戸の壁には戸棚があり、絵が掛かっている。アリスは棚のオレンジ・マーマレードのびん

をとったり戻したりもしている。まるで普通の家の居間にいるようなんびりとした雰囲気だ。こんなに落ちているんだもの、もう階段から落ちるのだから怖くはないとアリスは思う。学校で習ったことを思い出しながら、地球の中心までは何マイルかとか、地球のむこう側に着いたらそこはニュージーランドなのかオーストラリアなのか礼儀正しく尋ねてみようと考えたり、飼い猫のダイナが寂しがらうだろうとか、誰かミルクをあげてくれるだろうかと思ひめぐらす。そしてずっと落ちていったあとで、小枝や枯れ葉の山の上にけがもなく着地する⁶⁾。

そこからたくさんの扉がついた廊下をさまよい、小さな黄金の鍵をガラスのテーブルの上に見つける。小さな扉にその鍵が合うことがわかるのだが、体が入らない。すると小さなびんに気がつき、「わたしをお飲み」と書いたラベルがついている。この物語はこの辺りからどんどん不思議の国らしくなってゆく。『不思議の国のアリス』では、どこにでもありそうな川べりからうさぎを追いかけて穴に入ることによって魔法の世界へ入ってゆく。すべては実は夢のなかの出来事なのだが、それは最後を読むまでわからない。そのことも、現実にもみる夢がさめてみるまで夢だとわからないのと同じだ。

続編『鏡の国のアリス』(*Through the Looking-Glass*, 1871) は、居間の大きなひじ掛け椅子に座ってアリスが飼い猫ダイナの子どもキティに話し掛けているところから始まる。アリスが巻いている毛糸玉にキティがじゃれているのを、アリスが叱ったりかわいがったりしているのだ。『不思議の国のアリス』の冒頭ではダイナの名前が出てくるだけだったが、ここではそのダイナに子猫が生まれている。アリスも少しおとなになっていることを読者に暗示しているのかもしれない。言うことをきかないキティにそのすねた顔を映してみせるために、アリスは子猫を暖炉の上にある鏡の前に持ち上げる。

..... So, to punish it, she held it up to the Looking-glass, that it might see how sulky it was—“and if you’re not good directly,” she added, “I’ll put you through the Looking-glass House. How would you like *that*?”

“Now I’ll tell you all my ideas about Looking-glass House. First, there’s the room you can see through the glass—that’s just the same as our drawing-room, only the things go the other way. I can see all of it when I get upon a chair—all but the bit just behind the fireplace. Oh! I do so wish I could see *that* bit! Well then, the books are something like our books, only the words go the wrong way; I know that, because I’ve held up one of our books to the glass, and then they hold up one in the other room.

“How would you like to live in Looking-glass House, Kitty? Oh, Kitty! How nice it would be if we could only get through into Looking-glass House! Let’s pretend the glass has got all soft like gauze, so that we can get through. Why, it’s turning into a sort of mist now, I declare! It’ll be easy enough to get through—” She was up on the chimney-piece while she said this, though she hardly knew how she had got there. And certainly the glass *was* beginning to melt away, just like a bright silvery mist.

In another moment Alice was through the glass, and had jumped lightly down into the Looking-glass room.....

Then she began looking about and noticed that what could be seen from the old room was quite common and uninteresting, but that all the rest was as different as possible.⁷⁾

おりこうにしないと鏡のむこうの国にやってしまうわよ、とキティをおどしていたのが、いつの間にかアリスは自分が暖炉の上にあがっていて、そこにある鏡が銀色のもやであるかのように柔らかくなり、鏡をぬけて懂れていたむこうの国に入ってゆく⁸⁾。

鏡のむこうの国では、現実の世界から鏡のなかにみえる部分は現実と同じだが、そのほかの部分はずいぶん違う。最初に気づくのは、暖炉の上の置き時計の文字盤だ。鏡のなかでは時計の背面が映っていただけなのに、鏡の国の時計には顔がついていてアリスに笑いかけている。ジョン・テニエル（John Tenniel, 1892-1914）は現実の鏡のなかに入ってゆくアリスの姿と、鏡の国の鏡から出てくるアリスの姿を見事な挿絵に描いており、版によってはその二枚の挿絵が背中合わせになるよう印刷されていて、とても楽しい。雪の降る冬のある日に、居間にある暖炉の前のひじ掛け椅子で子猫と遊んでいたアリスが、鏡というどこの家にもある日用品を通して魔法の国に入ってゆくこの物語は、「不思議の国」への行きかたよりももっと身近なところで起きている。『鏡の国のアリス』を読んだあと、子どもが鏡を不思議で神秘的なものとして感じるのは当然だろう。

二冊の『アリス』はどちらもアリスが夢をみているという設定だが、夢からさめたあと、またすぐに物語冒頭の現実のつづきにアリスがすんなりと戻ってゆくのも大切なところだ。『不思議の国』ではアリスは川べりで本を読んでいる姉の横で目をさますし、『鏡の国』では夢のなかでアリスが揺さぶっていたチェスの赤の女王は、実は子猫のキティだったことに気がつき、また猫とおしゃべりをとめどもなく続けてゆく。このふたつの物語は毎日のようにみる夢でさえ、ファンタジーの領域に入るものとして高みにあげているのだ。

2. カンザスの竜巻き

L・フランク・ボーム (Lyman Frank Baum, 1856-1919) の『オズの魔法使い』(*The Wizard of Oz*, 1900) は写実主義が圧倒的に多いアメリカの児童文学作品のなかではめずらしい存在だ。アメリカに移住した白人たちの間でファンタジーがあまり生まれなかった理由についてアリソン・ルーリーは、アメリカ大陸には「架空の不思議のかわりに新大陸の自然の不思議があり、妖精や竜のかわりにインディアンや野生の動物がいて、魔法のかけられた湖や山のかわりにナイアガラの滝やロッキー山脈があった」と述べている⁹⁾。「童話の国、妖精の国」としてよく語られるイギリスと、おもしろいほどの対照をなす。しかしイギリスの想像力とアメリカの自然をまるで融合させるかのように、『オズの魔法使い』ではアメリカの大自然の驚異のひとつである竜巻が魔法の国への入り口になっている。

両親のいないドロシーはカンザスの平原でヘンリーおじさん、エムおばさん、そして犬のトトと一緒に暮らしている。その風景は、平原も、たがやした土地も、日に焼かれた草も、ペンキの色褪せた家までもが、すべて灰色だ。ある日のこと、北と南から強い風が巻き起こり、怖がってベッドの下に隠れてしまった犬のトトを追いかけているうちに、ドロシーは地下の避難壕に入りそこねてしまう。そして突然家が回転しはじめ、竜巻によって空中に巻き上げられてしまったことがわかる。

From the far north they heard a low wail of the wind, and Uncle Henry and Dorothy could see where the long grass bowed in waves before the coming storm. There now came a sharp whistling in the air from the south, and as they turned their eyes that way they saw ripple in the grass coming from that direction also.....

“There’s a cyclone coming, Em,” he called to his wife; “I’ll go look after the stock.” Then he ran toward the sheds where the cows and horses were kept.

Aunt Em dropped her work and came to the door. One glance told her of the danger close at hand.

“Quick, Dorothy!” she screamed; “run for the cellar!”

Toto jumped out of Dorothy’s arms and hid under the bed, and the girl started to get him..... Dorothy caught Toto at last, and started to follow her aunt. When she was halfway across the room there came a great shriek from the wind, and the house shook so hard that she lost her footing and sat down suddenly upon the floor.

A strange thing then happened.

The house whirled around two or three times and rose slowly through the air. Dorothy felt as if she were going up in a balloon.

The north and south winds met where the house stood, and made it the exact centre of the cyclone. In the middle of a cyclone the air is generally still, but the pressure of the wind on every side of the house raised it up higher and higher, until it was at the very top of the cyclone; and there it remained and was carried miles and miles away as easily as you could carry a feather.....

It was very dark, and the wind howled horribly around her, but Dorothy found she was riding quite easily In spite of the swaying of the house and the wailing of the wind, Dorothy soon closed her eyes and fell fast asleep.....

She was awakened by a shock the jar made her catch her breath and wonder what had happened..... Dorothy sat up and noticed that the house was not moving; nor was it dark, for the bright sunshine came in at the window, flooding the little room. She sprang from her bed and with Toto at her heels ran and opened the door.

The little girl gave a cry of amazement and looked about her, her eyes growing bigger and bigger at the wonderful sights she saw.

The cyclone had set the house down, very gently in the midst of a country of marvelous beauty.¹⁰⁾

何時間も何マイルも、家ごと竜巻きに飛ばされているドロシーだが、深い井戸をまっすぐ落ちてゆくアリスがのんきに考えごとをしているのと同じように落ち着いていて、何が起きるんだろうかと思いつつもトトと一緒に眠ってしまう。衝撃に目をさますと、家がどこかに着陸したことに気がつく。ドロシーが迷い込んだその土地には、したたる緑の草、おいしそうに熟した実をつけた木々、色とりどりの花々、あざやかな羽をもつ小鳥たち、きらきら輝きながら流れる小川などがあり、風景すべてが灰色のカンザスの平原からやってきたドロシーにとってはめくるめくような別世界である。これからドロシーがたどってゆく道は「黄色のレンガの道 (the road of yellow brick)」で、オズの魔法使いが住んでいるのは「エメラルドの都 (Emerald City)」だ。この物語には色彩がふんだんに登場する。ミュージカル映画の『オズの魔法使い』(1939年)では、現実の世界の場面をモノクロで、オズの国に着いてからの場面をカラーで描いていて、その変化が目を惹く。

竜巻きはあこがれる対象ではありえないが、その予測不可能なところ

や驚くべき破壊力は、アリソン・ルーリーが言う想像上のできごとによってかわるほどの自然の驚異にちがいない。それが魔法の国への行きかたとして登場する『オズの魔法使い』はやはり新大陸アメリカらしいファンタジーであろう。この物語を知ること、引用の冒頭で読んだように、風の音が遠くから聞こえてきたり、風に草がなびいている様子を見たりすれば、竜巻きとオズの国に連れてゆかれたドロシーのことを考えてしまうだろう。そして家に帰りたいドロシーとトト、脳みそがほしいかかし、臆病なライオン、心がほしいブリキのきこりが乗り越えてゆく冒険の数々、求めていたものは初めから手元にあったのだと最後に気づくメーテルリンクの『青い鳥』のようなテーマなども、読者の心に広がるかもしれない。あたりまえのことだが、物語世界の記憶は積み重なってゆけばゆくほど複雑に絡みあい豊かになってゆく。『オズの魔法使い』は自然現象に魔法の国への案内人の役をあたえた物語である。

3. 子ども部屋の窓

ジェイムズ・M・バリ (James Matthew Barrie, 1860-1937) の『ピーター・パン』(Peter Pan, 1911) は児童文学作品と言われているわりには言葉やイメージがむずかしいが、丁寧に読んでゆくことによって心に残ることも多い物語である。ダーリング家の子どもたち、ウェンディー、ジョン、マイケルの三人が、決して大人にならない永遠の少年ピーター・パンに誘われて、ネバーランドと呼ばれるインディアンや海賊や人魚のいる島へゆく。

母親のダーリング夫人は、子どもたちの夢のなかに「ピーター・パン」という言葉がひんぱんに登場することを不思議に思っていた。ウェンディーに尋ねてみると、それは小さな少年で、夜に子ども部屋の窓から入ってくるという。ある夜に、子ども部屋で縫い物をしながら寝入ってしまったダーリング夫人のもとに、ウェンディーが言っていたように窓

から少年が入ってくる。

..... while she was dreaming the window of the nursery blew open, and a boy did drop on the floor. He was accompanied by a strange light, no bigger than your fist, which darted about the room like a living thing; and I think it must have been this light that wakened Mrs Darling.

She started up with a cry, and saw the boy, and somehow she knew at once that he was Peter Pan..... He was a lovely boy, clad in skeleton leaves and the juices that ooze out of trees; but the most entrancing thing about him was that he had all his first teeth.¹¹⁾

その時に乳母役の犬のナナに飛びかかれてピーター・パンは窓の外へ逃げ出すが、ナナに影をとられてしまい、その影を取りかえしにやって来たところでウェンディーに初めて会うことになる¹²⁾。赤ちゃんが最初に笑うとその笑いのかけらが妖精になること、子どもが妖精を信じなくなると妖精は死んでしまうこと、赤ちゃんのときに乳母車から落ちたロスト・ボーイたちはネバーランドで自分と一緒に暮らしていること、自分はダーリング夫人が子どもたちに毎夜聞かせてあげる物語をこっそり聞くために窓辺に来ていたこと、つばめが軒下に巣を作るのはお話を聞くためであること。ピーター・パンはウェンディーにいろいろなことをおしえる。この出会いの場面には珠玉のエピソードがいっぱい詰まっている。物語のなかの主人公が物語に夢中になっている、という設定はなんとも素敵だ。

物語をネバーランドにいるロスト・ボーイたちにも聞かせてあげるためにピーターはウェンディーを連れてゆこうとする。自分たちがいなく

なってしまったらママがかわいそうだし、それに飛び方だってわからないと断るウェンディーに、おしえてあげるからだいじょうぶとピーターはあきらめない。ジョンに本当に飛べるのかどうか尋ねられ、ピーターは部屋の中をぐるりと飛んでみせる。

It looked delightfully easy, and they tried it first from the floor and then from the beds, but they always went down instead of up.

“I say, how do you do it?” asked John, rubbing his knee. He was quite a practical boy.

“You just think lovely wonderful thoughts.”

He showed them again.

“You’re so nippy at it,” John said; “couldn’t you do it very slowly once?”

Peter did it both slowly and quickly. “I’ve got it now, Wendy!” cried John, but soon he found he had not. Not one of them could fly an inch.....

Of course Peter had been trifling with them, for no one can fly unless the fairy dust has been blown on him. Fortunately one of his hands was messy with it, and he blew some on each of them, with the most superb results.

“Now just wriggle your shoulders this way,” he said, “and let go.”

They were all on their beds, and gallant Michael let go first. He did not quite mean to let go, but he did it, and immediately he was borne across the room.....

They were not nearly so elegant as Peter, they could not help

kicking a little, but their heads were bobbing against the ceiling, and there is almost nothing so delicious as that.....

Up and down they went and round and round. Heavenly was Wendy's word.

"I say," cried John, "why shouldn't we all go out!"

Of course it was to this that Peter had been luring them.

Michael was ready: he wanted to see how long it took him to do a billion miles. But Wendy hesitated.

"Mermaids!" said Peter again.

"Oo!"

"And there are pirates."

"Pirates," cried John, seizing his Sunday hat, "let us go at once." (pp. 51-53)

最初ピーターは「なにか最高にすてきなことを考えれば宙に浮くよ」とおしえるが、それは子どもたちをからかっていただけで、本当は「妖精の粉」が必要だった。ピーターといつも一緒に妖精ティンカー・ベルの粉を吹きかけてもらって、寝巻きを着たまの三人の子どもたちは子ども部屋のなかを飛びはじめる。男の子のジョンとマイケルは飛べることにすっかり夢中になり、すぐにでも外へ飛び出してゆきたがる。初めはためらうウェンディーだったが、弟たちも一緒だし、ピーターがおしえてくれる海賊やインディアンや人魚の話はあまりにも魅惑的だった。

子どもたちの様子がおかしいことに気づいた犬のナナが、パーティーに出かけていたダーリング夫妻を連れてもどってくるが、すでに子どもたちはピーター・パンとともに大きな窓から飛び立ってしまったあとだった。

Then Peter knew that there was not a moment to lose. “Come,” he cried imperiously, and soared out at once into the night followed by John and Michael and Wendy.

Mr and Mrs Darling and Nana rushed into the nursery too late. The birds were flown. (p. 54)

ピーター・パンが言う「二つめの角を右にまがって、朝までまっすぐ (“Second to the right, and straight on till morning.” p. 56)」というネバーランドへの行きかたは、魔法の国へ行くための一種の合言葉として知られるようになった。『アラビアン・ナイト』の「アリババと四十人の盗賊」のなかで、財宝が隠された洞窟を開ける時にアリババが使った「開けごま」という呪文と同じくらいに有名なはずだ。ごく日常的な「二つめの角を右にまがる」という道順と「朝までまっすぐ」という不可思議な道順の組み合わせが愉快だ。子ども部屋という日常から、寝巻きのまま大きな窓をぬけて、妖精の粉の力を借りて夜空へと飛び立ってゆく子どもたちにとって、半分は現実の世界、もう半分はすでに魔法の世界のような宙ぶらりんの感覚をあたえる道順であろう。子どもたちが寝る前にベッドで物語を読んでもらうときに、この永遠の少年ピーター・パンが子ども部屋の窓の外で耳を澄まして聞いているかもしれないと思えるならば、その子どもたちは二重の意味で物語を楽しむことができるにちがいない。

4. 空き部屋の衣装だんす

C・S・ルイス (Clive Staples Lewis, 1898-1963) の『ライオンと魔女』(*The Lion, the Witch and the Wardrobe*, 1950) は《ナルニア国物語》(*The Chronicles of Narnia*, 1950-56) のなかで最初に出版された本で、ルイス自身が薦めるナルニア国年代記を読む順番のなかでは二番

目の物語にあたる¹³⁾。ロンドンの空襲をさけて田舎の知り合いのお屋敷に疎開してきたピーター、スーザン、エドモンド、ルーシーの四人兄弟姉妹が、着いた翌日が雨で、外で遊ぶかわりにお屋敷のなかを探検することからこの物語は始まる。

そのお屋敷は終わりがないように思えるほどの広さで、不思議な部屋がつぎつぎと現われる。絵がたくさん飾られ、鏡の置いてある細長い部屋、ハーブがある緑の壁紙の部屋、階段を三段降りてそれから五段上がる場所、小さな広間からバルコニーにつながる扉のある部屋、本がぎっしり並べられたいくつもの続き部屋。そして大きな衣装だんすのほかには何もなかった部屋に四人はやって来る。なんにもないや、と言って上の三人はその部屋を出て行ってしまいが、いちばん年下のルーシーはそこに残り、その衣装だんすの扉を開けてみる。

..... To her surprise it opened quite easily, and two mothballs dropped out.

Looking into the inside, she saw several coats hanging up—mostly long fur coats..... She immediately stepped into the wardrobe and got in among the coats and rubbed her face against them..... Soon she went further in and found that there was a second row of coats hanging up behind the first one. It was almost quite dark in there and she kept her arms stretched out in front of her so as not to bump her face into the back of the wardrobe. She took a step further in—then two or three steps—always expecting to feel woodwork against the tips of her fingers. But she could not feel it.

“This must be a simply enormous wardrobe!” thought Lucy, going still further in and pushing the soft folds of the coats aside

to make room for her. Then she noticed that there was something crunching under her feet. “I wonder is that more mothballs?” she thought, stooping down to feel it with her hand. But instead of feeling the hard, smooth wood of the floor of the wardrobe, she felt something soft and powdery and extremely cold. “This is very queer,” she said, and went on a step or two further.

Next moment she found that what was rubbing against her face and hands was no longer soft fur but something hard and rough and even prickly. “Why, it is just like branches of trees!” exclaimed Lucy. And then she saw that there was a light ahead of her; not a few inches away where the back of the wardrobe ought to have been, but a long way off. Something cold and soft was falling on her. A moment later she found that she was standing in the middle of a wood at night-time with snow under her feet and snowflakes falling through the air.¹⁴⁾

毛皮のコートがたくさん掛かった衣装だんすのなかは、数歩すすんでもうしろの壁にはたどり着かず、そのうちに足元には雪が、手には木の枝が触れるようになる。遠くに明かりがみえ、もう一歩踏み出すとルーシーは雪が降る森のなかに立っていた。好奇心が恐怖心にまさり、ルーシーは夜の森のなかを雪を踏んですすんでゆく。ふりむくと、樹々のあいだから衣装だんすの扉のむこうにある空き部屋の明るさがまだかすかにみえる。森のなかの遠くにみえるもうひとつの明かりをみざして十分間ほど歩いてゆくと、それは街灯であることがわかった。かくれんぼうで衣装だんすや押入れに隠れたことのない子どもなどいるだろうか。ドアのすき間から線のように細くみえる外界とは隔てられた暗闇のなか

で、鬼が来て自分をつかまえるまでの恐怖と興奮が入りまじった時間。そこに『ライオンと魔女』のこの場面の記憶が加わることによって、その時間はなんと魔法めいたものになることだろう。暗闇のうしろには森が広がっているかもしれないのだ¹⁵⁾。

ルーシーは、ナルニアと呼ばれるその別世界でフォーン（上半身が人間で下半身がヤギの神話の生き物）のタムナスさんの家でお茶をごちそうになったあと、衣装だんすを抜けて現実世界に戻ってくる。そのことをピーター、スーザン、エドマンズの三人にもおしえてあげようと衣装だんすのなかをみせるが、それは毛皮のコートが掛かっているだけの普通のたんすに戻っていた。なかをのぞくたびに、いつもそこが別世界への通路になっていないことがこの衣装だんすの大きな魅力だ。そのことが、子どもたちが日常のなかでいつも目にする衣装だんすや戸棚の扉、細長いスティールのロッカーの扉でさえ、いつの日かそこを開けると違う世界につながっていることがあるかもしれない、と思わせることになるのではないだろうか。

ルーシーが森のなかでみつけた街灯も、ポーリーン・ベインズの線描の挿絵とともに、この物語を読んだ読者の心のなかにもいつまでも残るイメージである。街灯が放つ光の輪のなかに照らし出される雪は、ただ綺麗な光景であるだけでなく、ナルニアの森の街灯のイメージがそこに重なることによって、その体験は特別なものになるにちがいない。時代としては『ライオンと魔女』の前にくる物語『魔術師のおい』(*The Magician's Nephew*, 1955)を読めば、その街灯がなぜそこにあるのか、衣装だんすの材料になった木はどこから来たのか、謎が解けるのではあるけれども、それを知らないまま『ライオンと魔女』を先に読んだほうがずっといいと思う。謎のままのほうが、この衣装だんすや森のなかの街灯は想像力をかきたてるものなのだから。

5. 裏庭への扉

フィリップ・ピアス (Philippa Pearce, 1920-2006) の『トムは真夜の庭で』 (*Tom's Midnight Garden*, 1958) は、主人公が時間のなかを行き来する「タイム・ファンタジー」と呼ばれる物語である。トムは弟のピーターと夏休みを自宅の裏庭で過ごすのを楽しみにしていたのに、ピーターがはしかにかかったため、親戚のキトソン家にあずけられることになった。キトソン家は大きな屋敷を改装してアパートにした建物の二階に住んでいた。一階のホールには三階に住む大家のバーソロミュー夫人が毎日ネジを巻きに降りてくる大時計があるが、その時計は時刻通りではないまちがった数を打つ壊れた時計だった。

同じ年頃の子どももいないし自由に遊び回る裏庭もないトムは、毎晩なかなか寝つけず、時計の鳴らすまちがった音をかぞえるのが習慣になっていた。ある夜、真夜中に1から12まで数えたあとに、なんと13番目の時計の音がした。いくら壊れた時計でも、今までに13時を打ったことはなかった。そんなはずがないと思いながらも、時計の針が何時をさしているかを確かめてみるために、トムは真っ暗な廊下と階段を歩いて一階のホールに降りていってみる。

Thirteen? had it really struck thirteen? Even mad old clocks never struck that. He must have imagined it. Had he not been falling asleep, or already sleeping? But no, awake or dozing, he had counted up to thirteen. He was sure of it.....

Tom sat up in bed, a little angry in his turn. "Now," he said, "I'm going to prove this, one way or the other. I'm going to see what the clock fingers say. I'm going down to the hall."

..... The lights on the first-floor landing and in the hall were turned out The only illumination was a sideways shaft of

moonlight through the long window part way up the stairs. Tom felt his way downstairs and into the hall.

..... He could find the grandfather clock—a tall and ancient figure of black in the lesser blackness—but he was unable to read its face

Tom studied the moonbeam, with an idea growing in his mind. From the direction in which the beam came, he saw that the moon must be shining at the back of the house. Very well, then, if he opened the door at the far end of the hall he would let that moonlight in. With luck there might be enough light for him to read the clock-face.....

Tom opened the door wide and let in the moonlight. It flooded in The illumination was perfect, but Tom did not at once turn to see what it showed him on the clock-face. Instead he took a step forward on to the doorstep. He was staring, at first in surprise, then with indignation, at what he saw outside. That they should have deceived him—lied to him—like this! They had said, “It’s not worth your while going out at the back, Tom A sort of back-yard, very poky, with rubbish bins. Really, there’s nothing to see.”

Nothing ... Only this: a great lawn where flower-beds bloomed; a towering fir-tree, and thick, beetle-browed yews that humped their shapes down two sides of the lawn; on the third side, to the right, a greenhouse almost the size of a real house; from each corner of the lawn, a path that twisted away to some other depths of garden, with other trees.¹⁶⁾

一階の住人たちが起きると困るので明かりをつけることができず、裏庭へ通じるドアを開ければ月の光が射し込むはずだと考えたトムは、大時計の文字盤を読むために今まで通ったことのない扉を開けてみようと思う。おじさんとお婆さんはその裏庭のことを、ゴミ箱と一階の住人が車を置いているだけの舗装されてしまった狭い庭で、出て行ってみる価値はない、とトムにおしえていた。ところがどうだろう、トムが扉の外にみたものは、広々とした芝生に花壇の花々、そびえたつもみの木、芝生を縁どるいちいの茂み、家ほどの大きさもある温室、そして庭の奥へと伸びる小道があちこちにあるような立派な庭だった。おじさんとお婆さんは自分に嘘をついてこんな素晴らしい庭を隠していたんだ、と憤慨するトムだったが、明日になったら思う存分この庭で遊んでやろうと思ってベッドに戻る。

翌日、裏庭への扉を開けてみると、そこはおじさんとお婆さんが言った通りの狭苦しい、素敵なところなどひとつもない、ゴミ箱と車が一台あるだけの舗装された庭だった。混乱してしまうトムだったが、もう一度、真夜中に大時計が13時を打つのを聞いてから裏庭に出てみることにする。そしてまた行くことのできた真夜中の庭では、ハティという少女との出会いが待っていた。裏庭への扉はいつでも素晴らしい庭に通じているわけではないところが『ライオンと魔女』の衣装だんすと同じで、それが扉をより魔法めいたものになっている。さらにこの物語では、古い大時計が真夜中に13時を打つことが美しい裏庭へとトムが入ってゆくための条件になっていて、大時計と裏庭への扉との関係は、『ピーター・パン』でティンカー・ベルの妖精の粉をふりかけてもらうことで子どもたちが大きな窓から夜空へ飛び立ってゆけることと似ていなくもない。

こんなふうに、いつでもそうなるというよりは、なにかの条件があってそうなる、という物語の設定の方が、子どもたちの日常においても、いつもは平凡なものだけれど、なにかの力がはたらけばそれは魔法の国

につながるものになるかもしれないと思えるし、だからこそファンタジーが日常を彩ることになるのだ。しかも『トムは真夜中の庭で』ではそれは裏庭への扉であり、扉を抜けてこちらからこちらへ行くという行為は「これ以上に日常的な動作はなく、それをを用いることはどんな子どもにもわかる言語」なのだ¹⁷⁾。そしてこの物語は時計が時を告げる音をかぞえる行為にさえ、魔法を期待する気持ちをあたえることになった。

6. 駅のプラットフォーム

J・K・ローリング (Joanne Kathleen Rowling, 1965-) の『ハリー・ポッターと賢者の石』(*Harry Potter and the Philosopher's Stone*, 1997) は、出版されるやいなや世界各国で爆発的な人気を博し、ビデオゲーム世代の子どもたちをふたたび読書へと引き戻した本だと言われた。挿絵すら一枚もない、児童書としてはかなり長めの本が子どもたちに受け入れられたのである¹⁸⁾。この本はその意味でも魔法の本といえるだろう。

一歳の時に両親を失ったハリーは、親戚のダーズリー家でおじさん、おばさん、いとこにいじめられながら十年間を過ごしてきた。十一歳を迎える7月31日の誕生日の真夜中に、魔法界からの使者であるハグリッドという大男がやってきて、自分は魔法使いなのだということ、hogwartsという魔法界の学校に入学する時がやってきたことをおしえられる。そのhogwarts魔法魔術学校へゆくためには、9月1日にロンドンのキングズ・クロス駅9と3/4番線から午前11時発のhogwarts特急に乗ればいいのだという。そんなばかなプラットフォームがあるわけがないとおじさんに罵られながらもキングズ・クロス駅まで車で送ってもらったハリーだが、心配した通りそんなプラットフォームはどこにも見あたらない。大きなトランクとハグリッドが誕生日祝いに買ってくれた白いふくろうをかかえて、ハリーは途方に暮れる。

そこに「相変わらず、マグルで一杯ね」という女性の声が聞こえる。

「マグル (Muggle)」というのは魔法使いではない人間のことを指す魔法界の言葉だとハグリッドにおそわっていたハリーは、その赤毛の家族の跡をついてゆく。一番上の息子が9番線と10番線のプラットホームの方に向かってゆくが、大勢の旅行客に遮られて、どうやってその男の子が消えたのかわからなかった。つぎに双子の男の子たちが続くが、9番線と10番線の間に向かって行ったと思ったら、急に消えてしまう。切羽詰まったハリーはその母親らしき女性にやり方をきいてみるしかないとは決心する。

There was nothing else for it.

“Excuse me,” Harry said to the plump woman.

“Hullo, dear,” she said. “First time at Hogwarts? Ron’s new, too.”

She pointed at the last and youngest of her sons.....

“Yes,” said Harry. “The thing is—the thing is, I don’t know how to—”

“How to get on to the platform?” she said kindly, and Harry nodded.

“Not to worry,” she said. “All you have to do is walk straight at the barrier between platforms nine and ten. Don’t stop and don’t be scared you’ll crash into it, that’s very important. Best do it at a bit of a run if you’re nervous. Go on, go now before Ron.”

“Eh—OK,” said Harry.

He pushed his trolley round and stared at the barrier. It looked very solid.

He started to walk towards it. People jostled him on their

way to platforms nine and ten. Harry walked more quickly. He was going to smash right into that ticket box and then he'd be in trouble—leaning forward on his trolley he broke into a heavy run—the barrier was coming nearer and nearer—he wouldn't be able to stop—the trolley was out of control—he was a foot away—he closed his eyes ready for the crash—

It didn't come . . . he kept on running . . . he opened his eyes.

A scarlet steam engine was waiting next to a platform packed with people. A sign overhead said *Hogwarts Express, 11 o'clock*. Harry looked behind him and saw a wrought-iron archway where the ticket box had been, with the words *Platform Nine and Three-Quarters* on it.¹⁹⁾

赤毛の家族の母親がおしえてくれた魔法のプラットフォーム9と3/4番線への行きかたは、9番線と10番線の間にある改札の仕切りにまっすぐに向かってカートを押して走ってゆけばいいだけだった。ぶつかる、と思わず目を閉じてしまったハリーだったが、ぶつかる衝撃はなく、目を開けるとそこには、人でいっぱいのプラットフォームの横に紅色の蒸気機関車が停まっていた。「hogwarts特急、11時発」と書いた掲示板や「9と3/4番プラットフォーム」と書いた錬鉄製のアーチもみえる。こうしてハリーは魔法のプラットフォームから魔法の特急に乗り、hogwarts魔法魔術学校へゆくことができる。

この場面によってロンドンのキングズ・クロス駅という、ロンドン市内に行き先別にいくつもある駅のひとつが、魔法の国への入り口になったのだ。hogwarts特急の窓からみえる景色の変化や、hogwartsの自然描写をみれば、hogwartsがスコットランドのどこかにあることが想像できる。現実でもキングズ・クロス駅は北へ向かう汽車が出る駅だ。

《ナルニア国物語》のなかで2番目に出版された『カスピアン王子のつるぶえ』(*Prince Caspian*, 1951)でも、四人の子どもたちが駅のプラットフォームからナルニア国へ入ってゆく場面がある。しかしここではどの町のどの駅なのかはわからない。ロンドンのキングズ・クロス駅だとはっきりとわかっていることが大切なのだ。日常のなかのより具体的な場所が魔法界への入り口になったことで、この場面の魔法のイメージはより身近なものになったにちがいない。

第2巻『ハリー・ポッターと秘密の部屋』(*Harry Potter and the Chamber of Secrets*, 1998)に登場する暖炉から暖炉への空間移動には「煙突飛行粉(Floo powder)」という魔法の粉が必要であり、第3巻『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』(*Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*, 1999)では時間を行き来するために「逆転時計(Time-Turner)」という時計を使うことになる。第4巻以降もさまざまな空間移動の手段が登場するが、そのような魔法界の特別な道具を使うことなしに、キングズ・クロス駅での魔法のプラットフォームへの移動は行われている。だからこそ『ハリー・ポッターと賢者の石』のこの場面は、全7巻のシリーズのなかでも最も日常に近く、印象深い場面になっているのではないだろうか。駅のプラットフォームは、現実これから行く土地への期待と、魔法の国への想像が入り交じる場所になった。

おわりに

現実世界から魔法の世界へと主人公たちが足を踏み入れてゆく場面、C・S・ルイスの言葉を借りるならば、現実をこれほど魔法がかかったものにした場面を、7つのファンタジー作品のなかでみてきた。J・R・R・トールキンの言う〈ファンタジーの回復効果〉とは、ファンタジーを読んでゆくなかで、特別な役割を持つものが登場すれば、日常のなかにある同じものが平凡ではなくなり、前とはちがった秘められた意味を持ち

はじめる、ということだ。それは日常生活におもしろみをあたえてゆくもので、身近なものであればあるほど効果が高い。

異世界へ入ってゆく物語は、ここで取り上げた作品以外にもたくさんあるし、未知にたいする人間の憧れがあるかぎりこれからも綿々と書き続けられることだろう。《ハリー・ポッター》シリーズの人気の影に隠れてしまい日本ではあまり知られなかったフィリップ・プルマン (Philip Pullman, 1946-) の《ライラの冒険》シリーズ (*His Dark Materials*, 1995-2000) も異世界への旅を扱っている。第1巻『黄金の羅針盤』(*The Golden Compass*, 1995) では、主人公ライラがオーロラのかなたに別世界を垣間みることになるし、第2巻『神秘の短剣』(*The Subtle Knife*, 1997) と第3巻『琥珀の望遠鏡』(*The Amber Spyglass*, 2000) では、迷いこんだ別世界でライラが知り合った少年ウィルが、魔力をもつ短剣で空間を切り取ることによって、そこにまた別の世界への窓が出現する。このシリーズは多層に重なる世界がいくつも登場するかなり複雑な物語であるが、根本にあるのは現実世界と隣り合わせに異世界があるという、今までみてきた作品と同じ世界観だ。この作品はロンドンでは舞台にもかけられた。第1巻『黄金の羅針盤』が映画化されたこともあって、日本でもこれからもっと人気が高まるのではないかと思う。

どの物語でも、主人公たちは最後に自分の出発点である現実世界にもどってきている。魔法の国に行きっぱなしではいけないのだ。主人公が再び現実世界に帰ってくるからこそ、魔法の国は魔法の国であり続ける。これからもどんな舞台設定の物語が私たちを新しい魔法の国へと引き入れ、私たちの日常に彩りをあたえてくれるのか、待ち遠しい。

注

- 1) C. S. Lewis, "On Three Ways of Writing for Children," *Only Connect: Readings on Children's Literature* (Oxford UP, 1969), p. 215.

- 2) J. R. R. Tolkien, "On Fairy-Stories," *Tree and Leaf* (1964; HarperCollins, 2001), p. 59. このことについては、井辻朱美が『ファンタジーの魔法空間』(岩波書店、2002年)、p. 203のなかで「別世界のペガサスを知れば現実世界の馬がふしぎなものに見えてくる」と、言葉をかえて紹介している。
- 3) この「地続き」の「連続感」に関しては、上野瞭『現代の児童文学』(中公新書、1972年)、pp. 90~91に詳しく解説されている。
- 4) Humphrey Carpenter, *Secret Gardens: A Study of the Golden Age of Children's Literature* (Allen & Unwin, 1985)などを参照。
- 5) Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland* (1865; Puffin Books, 1994), pp. 2-5. これ以降、引用のなかで「.....」は筆者が本文の一部を省略したことをあらわす。「...」は原典のままの句読点。
- 6) 二冊の『アリス』に詳細な注釈をつけたことで有名なマーティン・ガードナーが、シグネットのペーパーバック版『アリス』のまえがきのなかで、G・K・チェスタトンの言葉を紹介している。それは妖精物語のなかでは世界が狂っているが主人公は狂わない、小説のなかでは主人公が初めから狂っていて、世界が安定して健全なことに苦しめられている、というものだ。こんな不思議な落下の途中でもアリスはまったく取り乱していない。そこがファンタジーのおもしろさである。Martin Gardner, "Introduction," *Alice's Adventures in Wonderland & Through the Looking-Glass* by Lewis Carroll (1865, 1872; Signet Classic, 2000), p. vi.
- 7) Lewis Carroll, *Through the Looking Glass* (1872; Puffin Books, 1994), pp. 6-9.
- 8) 鏡はファンタジーの小道具としてよく登場する。いちばん有名なのは童話『白雪姫』で継母のお妃が使う魔法の鏡だろう。『ハリー・ポッターと賢者の石』では「みぞの鏡 ("Mirror of Erised")」が重要な役割を担っているし、《ハリー・ポッター》シリーズの最終巻第7巻の *Harry Potter and the Deathly Hallows* (2007) には一対の手鏡が離れた場所にいる二人の人間をつなぐものとして登場する。日本でも1995年に第1回児童文

学ファンタジー大賞を受賞した梨木香歩の『裏庭』のなかで、古い洋館の廊下にある大きな鏡が異世界への入り口として使われている。

また、暖炉という舞台設定も見逃せない。《ハリリー・ポッター》シリーズの第2巻『ハリリー・ポッターと秘密の部屋』(*Harry Potter and the Chamber of Secrets*, 1998)では暖炉が空間移動の手段に使われているし、*Harry Potter and the Deathly Hallows*では、暖炉の上にある肖像画が主人公たちを救う抜け道を作り出している。

- 9) Alison Lurie, *Boys and Girls Forever: Children's Classics from Cinderella to Harry Potter* (Penguin Books, 2003), p. 132.
- 10) L. Frank Baum, *The Wizard of Oz* (1900; Wordsworth Classics, 1993), pp. 9-11.
- 11) J. M. Barrie, *Peter Pan* (1911; Puffin Books, 2002), pp. 18-20.
- 12) 自分の体から影を分断された喪失感、村上春樹の『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(1985年)で重要なモチーフとなっている。
- 13) 年代記を時代順に読むかどうかについては賛否両論がある。たいていの原書版は作者の推薦にしたがっているが、日本では岩波書店が当初からずっと日本語訳をオリジナルの出版された順で出している。1988年のBBCのテレビドラマも2005年のディズニー映画も、『ライオンと魔女』を最初に製作している。
- 14) C. S. Lewis, *The Lion, the Witch and the Wardrobe* (1950; Collins, 2001), pp. 12-14.
- 15) 村上春樹の『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』では、案内された部屋には洋服だんすの他にはほとんど何もなく、主人公がその洋服だんすを抜けて不思議な世界へと入ってゆく場面がでてくる。タイトルの「ワンダーランド」という言葉がアリスの物語を思わせるという大きな枠組のなかで、影との分離が『ピーター・パン』でピーターが影を取り戻しにやってくる場面を、通路としての洋服だんすが『ライオンと魔女』のこの場面を、個々に思い出させるだろう。村上模倣と言う

よりは、アリュージョンという形でイギリスのファンタジー作品の物語記憶を呼び覚ませ、自分の作品に深みを持たせているように思われる。

- 16) Philippa Pearce, *Tom's Midnight Garden* (1958; Puffin Books, 2000), pp. 19-24.
- 17) 井辻朱美『ファンタジーの魔法空間』（岩波書店、2002年）、p. 209.
- 18) アメリカ版、日本語訳版には各章の初めに扉絵がついているが、もともとのイギリス版にはそれすらない。
- 19) J. K. Rowling, *Harry Potter and the Philosopher's Stone* (Bloomsbury, 1997), pp. 70-71.